

地域（農村） — 棚田を含む中山間地域 —

棚田を守る高校生の活動（大分県立宇佐産業科学高等学校） おおいたけんりつうさきさんぎょうかがくこうとうがっこう うさし （大分県宇佐市）

【取組内容】

大分県立宇佐産業科学高等学校グリーン環境科では、宇佐市院内町にある両合棚田（棚田百選、つなぐ棚田遺産）をフィールドに棚田の保全活動など様々な活動に取り組んでいます。

（活動1）棚田の再生

・休耕田を再生し宇佐市の特産品であるクロダマル（黒大豆）の栽培や石積み法面の草刈り作業に取り組んでいます。また、良好な景観を創出するため、ヒマワリ・コスモスの植付けにも取り組んでいます。

（活動2）地域住民との交流

・地域が行う田植え体験などの交流会に参加するとともに運営のサポートを行っています。また、夏と冬に行う宿泊研修では、地元食材を使った料理づくりに挑戦するなど地域住民との交流に取り組んでいます。

（活動3）特産品づくり

・収穫物を使った特産品づくり（クロダマルを使った味噌・醤油づくり、ヒマワリ油の採取）にチャレンジしています。



画像提供：大分県立宇佐産業科学高等学校グリーン環境科

【取組に至った経緯】

令和元年度、国東半島宇佐地域世界農業遺産高校生「聞き書き」活動で、両合棚田再生協議会の会長に出会いました。取材中、昔のような美しい棚田に戻りたいという会長の熱い思いを聞いているうちに、「我々高校生にも何かできることはないか」と考え、学科をあげて棚田の保全活動等に取り組むこととなりました。

【取り組む際に生じた課題と対応】

休耕田を再生しクロダマル等の栽培を行っていますが、農地の再生、クロダマル等播種後の栽培管理（獣害対策等）など、あらゆる場面で課題に直面しますが、その都度、経験豊富な地域の方々からアドバイスをもらいながら課題を解決しています。

【取組の成果】

地域の方々と一緒に活動する中で、両合棚田の10年後の姿をみんなで考えるようになりました。過疎・高齢化の進んだ当地域において、地域住民だけで厳しい地形条件にある棚田を守っていくのは難しいため、高校卒業後も何らかの形で棚田の保全に関わっていくべきだと考えるようになりました。

【今後の展望】

引き続き、棚田の保全活動に取り組むとともに、両合棚田への来訪者を増やすため、地域住民や行政と連携し、地域の特産品づくりなど地域の魅力度をアップしていきたい。

『集落ぐるみの対策で鳥獣被害をほぼゼロに』
あまくさし ほうばるしゅうらくきょうてい
（熊本県天草市（方原集落協定））

【取組内容】

集落内の水田約12ha、総延長9kmに及ぶワイヤーメッシュ柵を集落の全世帯が参加して設置し、イノシシによる農作物の被害が平成30年度からほぼゼロで推移している。

【取組に至った経緯】

平成18(2006)年頃からイノシシ被害が増加したため、個別に電気柵を設置し対策を行っていたが、被害対策の知識も無く被害を止めることが出来なかった。

平成26(2014)年度から、専門家の指導を受け、12班に分かれてきめ細かな集落点検を行い集落点検マップを作成し、現状の分析と今後の対策を検討することで防除に対する意識を高めるとともに、平成26(2014)年度から鳥獣被害防止総合対策交付金を活用し、地域ぐるみでワイヤーメッシュ柵を整備した。

【取り組む際に生じた課題と対応】

ワイヤーメッシュ柵を適切に管理するため、集落内の柵を3ブロック9班に分け、それぞれに班長を任命し、柵に顔写真を載せた管理表を掲載することで、責任をもって管理している。

また、ワイヤーメッシュ柵の点検・管理の際、破損箇所や侵入箇所を見つけた場合は、ただちにブロック代表者会議を開催し、即日、遅くても翌日には補修作業を実施している。

【取組の成果】

もともと盛んであった集落内のコミュニケーションが、イノシシ対策により、さらに高まり集落内に強い連帯感を生んでいるほか、地域住民が柵の点検・管理、農地周辺の環境整備を自主的に実施している。

また、取組前の農作物被害は年間約90万円あったが、平成30(2018)年度以降は、ほぼ被害ゼロを維持している。

さらに、令和元年(2019)に熊本県の「鳥獣被害対策マイスター集落」に認定されたことから、県内外からの視察を受け入れ、集落の取り組みを他地域にも展開している。

【今後の展望】

集落ぐるみの対策を継続することにより後継者が育成され、今後も更に充実した鳥獣被害対策の推進が期待される。



講習会の様子



ワイヤーメッシュ柵設置の様子



集落パトロールの様子

【問合せ先】天草市農業振興課 TEL 0969-32-6792

『地域資源として捕獲鳥獣を有効活用する取組』

諫早市鳥獣処理加工組合（長崎県諫早市）

【取組内容】

諫早市鳥獣処理加工組合は、捕獲鳥獣をジビエとして利用するための処理加工・販売を行うとともに、捕獲従事者の育成やジビエ振興に関する研修会、長崎大学と連携して毎年学外授業の受入を行い、座学のほかに現地での被害調査、捕獲・止め刺しの見学、解体処理等の実習を実施し、鳥獣被害対策の必要性や命の大切さを若い世代に伝える活動を行っている。

【取組に至った経緯】

鳥獣による農作物被害を軽減させるための対策として鳥獣の捕獲を行っているが、捕獲した個体は埋設処理する必要があることから、埋設にかかる労力の負担軽減と、地域資源としてジビエ利用し地域の振興を図るために、平成27(2015)年に処理加工施設を整備した。

【取り組む際に生じた課題と対応】

施設を整備した当初は、ジビエに適さない個体が多く搬入されていたが、解体従事者が若手の狩猟者に対して捕獲・止め刺し技術の指導を行うほかに、解体技術の向上、HACCPによる衛生管理を徹底した。

また、初めてジビエを食べる方やジビエに苦手意識がある方でも美味しく食べられるように個体を選別し「はじめてジビエ」としてブランド化して販売されている。

【取組の成果】

捕獲した個体の埋設処理に苦勞していたが、捕獲個体を処理施設へ搬入することにより、個体の処理にかかる時間と労力が軽減したため、捕獲効率が向上し捕獲頭数の増加につながった。（平成28(2016)年度と比較して令和2(2020)年度の諫早市の捕獲頭数：18.5%増加）

また、平成28(2016)年度と比較して令和2(2020)年度は、処理施設への搬入頭数が約8倍増加し、搬入された個体のジビエ利用率が約50%増加、販売額は約24倍に増加した。

【今後の展望】

若い世代との連携・参画により、次世代につながる活動とするため、ホームページやSNSによる情報発信を行うとともに、ジビエ利用促進のため、ふるさと納税返礼品での地元産ジビエの利用や外国人留学生の嗜好に合わせたジビエ利用の拡大を図っていく。



諫早市鳥獣処理加工組合の外観



学外授業の様子



はじめてジビエのロゴマーク

【問合せ先】 諫早市鳥獣処理加工販売組合 TEL 0957-46-3329

地域（農村） — 農泊の推進 —

ゆきのうら 『雪浦ウィークから始まった心豊かに暮らせる地域づくり』 ゆきのうら NPO法人雪浦あんばんね（長崎県西海市）

【取組内容】

長崎県西海市の雪浦地域では、毎年5月の連休に地域回遊型のまち歩きイベント「雪浦ウィーク」をNPO法人「雪浦あんばんね*」を中心とした実行委員会の主催により開催している。雪浦ウィークは、地域全体がイベント会場となっており、来訪者は、自然や景観、住民とのふれあいを楽しみながら地域を散策して一般家庭や工房・アトリエ等の店舗で買い物、食事、体験等を行う。地域は無理をせず自らが楽しむことを第一に考えて来訪者を受入れ、迎える側と訪れる側の双方が楽しめるイベントとして年々来訪者を増やしている。

* 「あんばんね」とは、「遊んでいきませんか」という雪浦地域の方言。

【取り組む際に生じた課題と対応】

雪浦ウィークの4日間のイベント期間以外では地域への来訪者が少ない状況であったため、年間を通じた交流人口の増加を目指して、空き店舗を改修したカフェ・レストラン「ゆきや」を平成27(2015)年に整備、築90年の古民家を改修した宿泊施設「雪浦ゲストハウス森田屋」を平成30(2018)年に整備し地域と来訪者の交流の拠点として「雪浦あんばんね」が運営を行っている。

また、雪浦ウィークは、コロナ禍の3年間で、中止、オンライン、規模縮小での開催となった一方で、地域の音浴博物館の協力の元、星空コンサートを雪浦海浜公園の砂浜で開催するなど、社会状況に応じた活動で取組を継続している。

【取組に至った経緯】

過疎化、少子高齢化の進行により将来が危惧されていた地域の有志が実行委員会を立ち上げて第1回雪浦ウィークを平成11(1999)年に開催。開催を重ねていく中で地域住民が協力して活動を行う意識が醸成され、地域活性化の活動の中心となるNPO法人「雪浦あんばんね」を平成27(2015)年に設立。雪浦ウィークなどの交流事業のほか、農園・マルシェの運営、Webによる情報発信、移住相談窓口など地域を活性化する様々な活動・事業に取り組んでいる。

【取組の成果】

- ・雪浦ウィークは、人口約1,000人の地域に4日間で1万人が訪れるイベントに成長。雪浦地域の恒例行事として定着し、内外に認知されている。
- ・宿泊施設が無かった地域にゲストハウスを整備したことにより来訪者の滞在時間が伸び、体験や食事を行う機会も増え、地域の所得向上に繋げている。
- ・交流人口を関係人口に発展させ、更に関係人口を移住者に繋げ、平成12(2000)年以降、20年間の通算で80名が雪浦に移住。地域の飲食施設、宿泊施設等が移住者の働く場のひとつとなっており、また移住者や地域事業者による新たな取り組みも始まっている。

【今後の展望】

地域の宿泊施設や飲食店、豊かな自然環境、歴史、文化などの地域資源を守り、人々の営みと呼び戻す観光地域づくりに取組み、地域の過疎化、少子高齢化に歯止めをかけ、赤ちゃんからお年寄りまで、心豊かに暮らせる地域づくりを進める。

【問合せ先】雪浦あんばんね（雪浦ゲストハウス森田屋） TEL 0959-31-4071



自然豊かな雪浦地域



雪浦ウィークの様子



築90年の古民家を改修した雪浦ゲストハウス森田屋



蓄音機やレコードの視聴ができる音浴博物館

『農家の高齢化・後継者不足の解消と障害者の就労支援の両立』

社会福祉法人 出島福祉村（長崎県長崎市）

【取組内容】

社会福祉法人「出島福祉村」は、平成15(2003)年就労継続支援B型事業所「三和ゆめランド」を長崎市南部の宮崎町に開設し、地域の特産物である「びわ」の葉を活用したお茶（びわ茶）の製造、花苗等の栽培による取組を開始。

現在は地域の農業者と連携し、地域農業の担い手としての取組に加え、平成19(2007)年に直営農場の開設、平成25(2013)年には、長崎市内に直売所、カフェレストランを開設し、現在ではスイーツやジャム等地域の野菜を活用した加工品の開発や、更なる販路拡大を目指してネット販売サイト(びわからMARKET)を開設するなど、利用者の自立を目指す取組を進めている。

【取組に至った経緯】

地域の高齢化・後継者不足による、びわ畑の荒廃農地の増加とびわの葉が廃棄されていることに着目し、障害者の就労支援に活用することとした。

【取り組む際に生じた課題と対応】

利用者の障害の特性や程度に応じた作業支援を行うため、作業行程の細分化、マニュアル化を行うとともに、地域の農業者、県や市の技術指導により、職員を含め技術向上を図ってる。

販路拡大では、新たな加工品の開発、試食会の開催、コロナ禍に対応した非対面によるECサイトの開設などに取り組んでいる。

【取組の成果】

令和3(2021)年の農作業を担う障害者就業者数は、取組当初の平成15(2003)年の5人から現在では20人に拡大しており、取り組み開始から18年間で4倍に増加。

また、加工場やレストラン、直売所を含めたグループ全体では現在40人の障害者が就労している。

このような取り組みが評価され、令和4(2022)年度「農福アワード2022」において、優秀賞を受賞された。



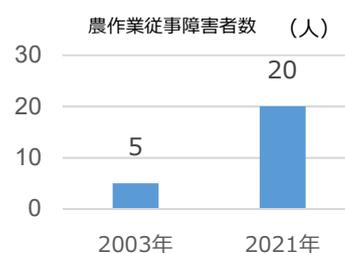
びわの葉の収穫作業



収穫されたびわの葉



びわの葉の加工



びわ茶 (商品名: 長崎ゆめびわ茶)



びわジャム



カフェレストラン
「KIZUNA」

【今後の展望】

出島福祉村では現在、観光農園の整備をすすめており、今後は交流人口の増加や、地域農産品の販売拡大による地元農家の所得向上を図るとともに、障害者の雇用確保、工賃・賃金の向上を目指す。

将来的にはこれらの取り組みを進め、障害のある方々が「一生安心して生活できる終の棲家」の整備を目指す。

【問合せ先】社会福祉法人 出島福祉村

TEL 095-842-8222